

## 東京例会における「白熱パネル」設立趣旨説明

——達人の比較思想からの脱却をめざして——

保坂俊司

この度、比較思想学会東京例会を再開するに当たり、昨今の比較思想学会の停滞の大きな原因の一つと考えられる、未完の比較思想の方法論に関する検討並びに、時代に即した比較思想の意義の構築を目指して、「白熱パネル」なる企画開催を開催することとなった。

さて現在の比較思想は、その日本における草分け的存在であり、偉大な哲学者であった故中村元本学会初代会長を中心に、学問としての基礎が確立されたと云っても過言ではない。しかし、その方法論は、いわば中村元博士にして初めて可能ならしめる、あるいは少なくとも、群を抜く資質を持った学者をして初めて可能であると云うような評価が、「比較思想の学」の提唱当初から存在した。

その理由は、比較思想は比較する複数の対象に対して、研究者としての知見が十分涵養され初めて可能になるものであり、

一朝一夕にそして安易に遂行できるような学問ではない、と云うような評価に象徴的に現れている。

確かに、そのような慎重な学問認識は重要であるが、逆に云えば比較思想は、結果的に幾つもの言葉を自在に扱う事が出来、またその思想的な背景に関しても同様に専門性を身に付けて初めて可能だとすれば、比較思想は天才や達人の学問となり、比較思想の学問としての存在意義や学会としてそれを継承する意味は、見出し難いことになる。

確かに、新しい学問は、その草創期、あるいは確立期に於いては、天才的な才能の持ち主が、大きくその道を切り開き、大まかな道筋をつけるという事は事実として存在する。だからこそ、各学問における古典が存在し、数百年さらには数千年の時を経過しても、その学問的価値を失わないのである。しかし残念ながら天才は、そう頻繁に出現しない。寧ろ今日の学問の多

くは、名も知れない多くの研究者の知的営為、つまり各学問を受け継いだ研究者の地道な研究活動の積み重ねの結果であった、と云い得よう。つまり、現在の学問の実質的な発展は、研究者達が各時代において営々と積み上げてきた努力の上に成立したものである。

さらに大切なことは、中村元先生自身が、比較思想の目指す方向性を比較研究を通じて、人類相互の理解を深め、誤解や相互不信を和らげ、平和な社会構築の一助とすることを目指す学問と位置付けておられ、学問的な厳密性以上にその意義を強調されておられる点である。

今日までの比較思想学会の一員としての反省を込めて言うならば我々は草創期の先学の偉大な活動に依存、あるいはその個人的な資質に頼り、比較思想の基礎的方法論に関する研究や、各時代の要請に應え得る方法論研究に関して、今までの活動は十分ではなかったのではないだろうか。

そこで、比較思想の学としての方法論の再構築に向けて、従来の比較思想の方法論の再検討という事が不可欠となる。その上で、従来のような東西思想の比較のみならず、中洋に優勢なイスラーム、さらには人文科学、社会科学分野は云うに及ばず、自然科学の諸分野との比較研究、あるいは共同研究と云った新たな領域を、積極的に開拓して行くことが求められる。

と云うのも現代人は、現在文明の発達による劇的な交通、通信手段の発達により人、物、金、情報等々の交流の複雑化、多

重化そして急速化に直面し、大いなる混乱状態にある。つまり急激な文化、文明の混淆の時代に対して、我々の知的構えは十分にはなっていないのである。そのために、他文化への理解よりも、それへの不信、排除の傾向が、一層強化され、世界各地で異文化・文明への理解不足に依ると思われる紛争が多発し、さらには、地球環境の破壊に見られるような自然科学の暴走を思想的に制する、諸学共同の活動も決して盛んとは云えない。

いづれにしても人類は文明の発達により、反って混沌の時代を迎えている。勿論その一方で、文明の機器の発達により、異質なる他者との交流は、非常に容易に可能となってもいる。要は、文化、文明交流の激動化に合わせたソフト面の確立が求められている。特にそれらの根本要因である思想の相互理解は、従来に増してその役割が求められている。このような時代にこそ、比較思想学会が過去四〇年以上に亘り追求してきた、比較思想の伝統に基づいた知的活動を、再構築し世界に発信して行かねばならないのではないだろうか。

何れにしても、グローバル化時代の二一世紀の世界的な要請に應え得る学問として、比較思想には大きな可能性がある、と云うよりも使命がある。そのような意図のもとに、東京例会に於いて、シリーズ『白熱パネル』が企画されたのである。

(ほさか・しゅんじ、比較思想・文明、インド宗教思想、

中央大学総合政策学部教授)